トゥーランドット

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トゥーランドット

【Ｎコード】
Ｎ３３３４Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
中国北京。皇女トゥーランドットは異国の王子に謎をかけ答えられぬ者を殺していく。彼女の美貌に心を奪われた韃靼の王子カラフは彼女に求愛しようとする。だが彼に仕えるリューは密かに彼を愛しており。プッチーニ最後の作品を小説化しました。
こちらにも掲載してもらっています。
ｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐａｉｎｗｅｓｔ．ｎｅｔ／

第一幕その一

第一幕　氷の姫

高い城壁がある。まるで天に達するのではないのか、という程にまで高く、それでいて厚い壁である。

そして城門もまた厚い。鉄で作られたその扉はまるで地獄へ向かう門のようである。

城門の側には一つの銅鑼がある。それは普通の銅鑼よりもずっと大きかった。そしてそのすぐ脇には数本の柱が立っている。

その柱の上には何かが刺さっている。見ればどれも若い男の首である。

皆それを溜息混じりに見ている。何か嫌な思いでもあるのだろうか。

長い歴史を誇り繁栄するこの国の都北京。今この街には一つの厄介な悩み事があった。

「良いか皆の者」

夕暮れの街で鎧兜に身を固めた一人の武官が宮城の門の前で民衆に向かって文を読み上げている。見れば宮城の門も城門と同じく重く厚い。やはり地獄の門に似ている。

「姫からのお達しである」

皆それを聞いてザワザワと声をあげる。

「我がトゥーランドット姫は自らが出された謎を解いた者を夫とすると布告されている」

皆それを聞いて顔を見合わせた。

「若しかして・・・・・・」

皆何かに期待しているようだ。

「だがペルシャの王子は謎を解くことが出来なかった。よって今日の月の出と共に死刑に処される」

「・・・・・・・・・・」

皆それを聞いて深い溜息をついた。
「場所はいつもの処刑場である。姫も来られるとのことである。以上」
そう言って武官はその場を後にした。
民衆達は彼の後ろ姿を見て落胆した声をあげた。
「また駄目だったのか」
「一体これで何人目なんだ」
彼等は憂いに満ちた表情で口々に言った。
「どうする、そのペルシャの王子様の最後を見に行くか」
誰かが言った。
「男前の王子様だったけれどな。何か可哀想だよなあ」
「しかし姫様も来られるんだろう、やはり見に行きたいよな」
別の者がそう言った。
「ああ、姫様はお目にかかりたいな」
一人の男がそれに賛同した。
「確かにお美しい姫様だけれども」
その中の一人が言った。
「しかしその心は氷の様に冷たいときたものだ」
皆そう言って落胆した。
それでも処刑場へ見に行く者はいる。だが誰もその表情は晴れない。
「何か暗い雰囲気ですね」
宮城の前を歩く一人の少女が彼等を見て言った。
長く黒い髪を後ろで束ねた小柄な可愛らしい少女である。黒い瞳は大きく愛らしい。
その白い肌は夕陽に映え更に美しく見える。漢人の服ではなく白い胡服を着ているところを見るとどうやら異民族であるらしい。
「そうなのか、わしにはよく見えぬが」
その後ろにいる老人が言った。白い髪に白い髭を生やしている。腰は曲がり顔には深い皺が刻まれているがその物腰からは気品が漂

っている。やはり胡服を着ている。
「陛下、やはりご気分が優れませぬか」
少女はその老人を気遣って声をかけた。
「いや、そうではない。ただ今日はどうも目の調子が悪くてな」
彼は弱々しく笑って答えた。
「あまり遠くのものが見えんのだ。耳は聞こえるからよいのだが」
「そうでございますか」
少女は少しホッとしたようである。
「それにしてもここでお会い出来ると思ったのですが」
少女は哀しそうな声で呟いた。
「カラフのことか」
老人はそれを聞いて言った。
「はい。折角この街におられると聞いて文を送りお約束までしたというのに」
彼女はさらに哀しそうな声を漏らした。
「リューよ、そう悲観するものではない」
老人は少女の名を呼んで慰めた。
「あ奴は約束を破るような男ではない。必ずここにやって来る」
「はい・・・・・・」
リューは頷いた。その言葉に少し元気付けられたようである。
「あ奴はこのわしの息子じゃ。だからこそよくわかるのじゃ」
「そうでしたね」
リューはそれを聞きようやく微笑んだ。
「このティムールのな。といってもわしは自分の国さえ守れなかった愚かな男じゃがな」
彼は自嘲を込めて言った。
「いえ、それは違います」
リューはティムールを慰めるようにして言った。
「陛下がお国を守れなかったのは陛下のせいではありませんわ。全ては天の時です」

「そうなのかの、実の弟の邪な企みに気付かず国を追われたのはわしが愚かであったからじゃが」
彼は苦渋に満ちた声で言った。
「お気になされないよう。あの男もいずれ天の裁きを受けます故」
「うむ・・・・・・」
彼は表情を暗くした。どうやら彼は実の弟の反乱により国を追われたらしい。
「父上」
そこで声がした。二人はその声を聞いて思わず顔を上げた。
「あ・・・・・・」
そこには青い胡服を着た若い男が立っていた。
背は高く体格は堂々としている。彫りの深い顔は引き締まり威厳と知性をかもし出している。黒い髪は後ろで下に束ねられている。黒い目には強い光が宿っている。
「殿下・・・・・・」
リューは彼の姿を見て思わず声を漏らした。
「カラフ、無事であったか」
ティムールも彼の姿を認めて思わず声を漏らした。

第一幕その二

「父上、リューお久し振りです。まさか再びお会い出来るとは思っておりませんでした」
彼はそう言うと二人を抱き締めた。
「本当に、とくご無事で」
リューはその手の中で涙を流しながら言った。
「ああ、そなたも無事で何よりだ」
彼はそんなリューに対して言葉を返した。
「そんな、勿体のうございます」
リューは彼の手から離れて謙遜して言った。
「いや、そんなことはない。私が父上とこうして再会出来たのへ全てそなたのおかげなのだ。このカラフ、心から礼を言わせてもらうぞ」
「殿下・・・・・・」
リューはそれを聞いて涙で服を濡らした。
「ところで父上、ペルシャの王子が処刑されるようですね」
カラフは処刑場へ向かう民衆を見て言った。
「お主は知っているのか？」
ティムールは息子に対して問うた。
「はい、この街に止まって暫く経ちます故」
カラフは暗い表情で答えた。
「この国の姫は自身の求婚者に謎を出すのです」
「ほう、そして」
ティムールはその話に興味を持った。
「答えられればそれで良し、しかし答えられぬ場合は・・・・・・」
「死か・・・・・・」
ティムールはそれを聞いて思わず呟いた。
「はい。そして今までに何人もの尊い命が散りました」

彼は顔を俯けて言った。
「そうなのか、惨い話よのう」
ティムールもそれを聞き表情を暗くさせた。
「しかしそれでも尚姫を求める者が出て来るのだ？聞くところによるとこの国は男しか国を継げぬというが」
彼は息子に問うた。
「それは姫があまりにも美しいからです。伝え聞くところによると姫はこの世のものとは思えぬ程の美しさだとか」
彼は父に対して答えた。
「湧き上がる心は抑えられぬということは例え命をかけようとも」
「はい。しかし既に多くの者が首を刎ねられました」
「それが城門に刺さっていた首・・・・・・」
リューも暗い顔をして言った。
「そう。答えられなかった者は月の出と共に首を刎ねられあの場所に晒されるのだ」
彼は言った。
「そして今日もまた一人か」
ティムールはうなだれて呟いた。
「はい、気の毒なことですが」
カラフは死にいくペルシャの王子に同情して言った。
「しかしそのお姫様とはそれ程美しいお方なのですか？」
リューが問うた。
「私はそれは知らない。だが絶世の美女だという話だ」
カラフはそう答えた。
「絶世の美女ですか」
彼女はそれを再び聞いて興味を持った。
「陛下、殿下」
そして二人に対して言った。
「もしよろしければそのお姫様を見に行きませんか？」
そして二人にそう提案した。

「あの姫をか」
彼はそれを聞いて言った。
「そうだな・・・・・・」
そして彼は考え込んだ。
「他ならぬそなたの頼みだ。私には異存は無いが」
そう言うと父のほうに顔を向けた。
「父上はよろしいでしょうか？」
そして父に尋ねた。
「わしは構わんぞ」
ティムールはしわがれた声で言った。
「そなた等がそれを願うのならな。そなた達の好きにするがいい」
「わかりました」
二人はそれを聞くと彼に頭を垂れた。
「では行くとしよう」
「はい」
こうして三人は処刑場に向かった。
処刑場には多くの人々が集まっていた。台の上には首切り役人が大きな刀を持って用意していた。
「おい、まだか」
民衆の一人が言った。
「まだだ、月は出ていないぞ」
処刑場の中に警護を務める兵士の一人が言った。
「そうか、そういえばお役人はまだ刀を磨いているな」
みれば首切り役人はその刀を念入りに磨いている。
「しかしあの人も忙しいよな」
民衆の中の誰かが言った。
「ああ、あの刀が乾く日はないんじゃないか」
別の者が言った。
「本人はあまり乗り気じゃないみたいだけれどな」
見ればその表情が暗い。

「そりゃそうさ。誰だってあんな仕事はしたくはない」
そうであった。首切り役人の気は晴れなかった。
「またこうして罪も無い者の首を切るのか」
役人は磨き終えた刀を見てそう呟いた。
「一体こうしたことが何時まで続くんだ」
暗澹たる気持ちだった。だがそれを顔に出すわけにはいかない。
「そろそろ月が出る頃だな」
彼は暗くなった空を見てそう言った。
「銅鑼が鳴れば全ては終わりだ」
見れば刑場の端にある銅鑼の前で銅鑼を叩く兵士も空を見ている。彼もまたその表情は暗い。
「そろそろだぞ」
民衆達も空を見ている。そして言った。
「出るぞ」
城門の上に明るいものが姿を現わしてきた。皆その顔が暗くなる。
「出たぞ・・・・・・」
遂に月が姿を現わした。首切り役人も銅鑼の前の兵士も暗い表情で配置についた。
銅鑼が鳴った。蒼白い月の下その音が刑場に響き渡った。
「来たぞ」
馬に乗った将校を先頭に兵士達の一団がやって来る。それぞれ手に槍や剣を持っている。
その中央に両手を後ろで縛られた若者がいる。浅黒い彫の深い顔をしている。服はペルシャの貴人の服だ。彼は蒼ざめた顔で前を歩いていく。
「まだお若いというのに」
民衆は彼の姿を見て気の毒そうに言った。
「ああ、だが謎を解くことが出来なかったからな」
彼に聞こえないように小声で言う。だがそれはおそらく耳に入っている。

「はじまるのですね」
刑場の中でも特に見通しのいい場所にいたリューは隣にいるカラフに対して言った。
「うむ、あの若者の命がこの血生臭い場所の露となる」
カラフは唇を噛み締めて言った。
「お情はないのですか！？」
リューは問うた。
「無駄だ、姫は氷の様に冷たい心を持っているという。彼の命は今ここで終わる」
「そんな・・・・・・」
リューはその言葉に絶望して言った。
見れば民衆もリューと同じ考えである。
「おい、何とかして恩赦はないものか！？」
誰かが言った。
「そうだ、謎を解けなかったというだけで死刑なんて酷過ぎるぞ！」
別の者が言った。

第一幕その三

「頼むから今回は恩赦を！」
その声はやがて刑場に満ちていった。
「助けてやれ、助けてやれ！」
だがそれはたった一人の声で打ち消された。
「黙りなさい！」
冷たく高い女の声だった。澄んではいるがその響きは何処か人のものではなかった。
「姫・・・・・・」
皆その声がした方を振り向いた。そこは刑場を一瞥する高座であった。そこに一人の女が立っていた。
その女は豪奢な金と銀に輝く丈の長い服を着ていた。頭には美しく装飾された冠を着けている。その美貌はこの世のものとは思えぬ程であった。肌は白く雪のようである。鼻は高く口は小さい。そして切れ長の黒い瞳はまるで鳳凰のそれのようであった。その全身からは神々しいまでの気が発されていた。
黒い髪は後ろに下ろされている。床にまで達さんとするそれはまるで絹のようであった。
「あれが姫か・・・・・・」
カラフはその眩いまでの姿を見て思わず息を飲んだ。
「噂は真だった。まさかこれ程までの美しさだとは・・・・・・」
彼は姫から片時も目を離すことが出来なくなっていた。
「我が夫となる者には謎を出す。そして答えられぬ場合には死を与える」
彼女は民衆を見下ろして言った。
「それは法で定められた通り。逆らうことは許しません」
彼女は刑場全体に響くその冷たい声で言った。皆その声に沈黙してしまった。

「はじめなさい」
彼は首切り役人に対して言った。役人はそれを聞くと彼女に対して一礼した。
銅鑼が再び鳴った。王子が処刑台の上に来た。
「いよいよか」
民衆はそれを見て絶望した気持ちになった。王子は跪き首を差し出した。
刀が振り下ろされた。王子の首は血飛沫と共に飛んだ。
「終わった・・・・・・」
皆それを見て落胆して言った。首は床に落ち役人に拾われた。
それを見届けた姫はその場から立ち去った。民衆も一人また一人とその場を後にした。
「終わりましたね・・・・・・」
リューは蒼ざめた顔で言った。
「姫様は何故あのようなことを・・・・・・」
彼女の顔は哀しみに満ちていた。
「全くじゃ。謎が答えられぬことが罪だというのか」
ティムールもその顔を暗くさせていた。
「・・・・・・・・」
その二人に対してカラフは沈黙していた。ただ姫がいたその場所を見つめていた。
「トゥーランドット・・・・・・」
彼はふと呟いた。
「それは何のことですか？」
リューが尋ねた。
「あの姫の名だ」
カラフは答えた。
「トゥーランドット・・・・・・不思議な名ですね」
「うむ。この世の者の名ではないようじゃ」
ティムールもそれを聞いて言った。

「父上、リュー」
彼は二人に顔を向けて言った。
「殿下、どうなさいました？」
リューが問うた。
「私はあの謎を解きたくなりました」
「え・・・・・・」
それを聞いた二人の顔が再び蒼白となった。
「私はあの姫の心を手に入れて見せます！」
彼は二人に対して叫んだ。
「馬鹿な、何を言っておるのじゃ！」
ティムールは息子に対して叫んだ。
「そうです、もし答えられない場合は・・・・・・」
リューも懸命に諌めようとする。だがカラフは聞かない。
「心配無用です。何故なら私は必ずその謎を解くからです」
彼は自信に満ちた声で言った。
「いかん、いかんぞ！」
ティムールはそんな息子に対し強い口調で言った。
「あのペルシャの王子を見ただろう、むざむざ殺されに行くつもりか！」
「違います、私は勝利と栄光を勝ち取るのです！」
カラフはそんな父の声を聞こうともしない。
「そう、私にかかれば謎など！」
「お止め下さい、お願いです！」
リューも必死に諌める。だがカラフはそれでも引かない。
「二人共御覧あれ、私があの姫を勝ち取るのを」
「一体何を騒いでおるのじゃ！？」
そこでかん高い声が響いてきた。
「む・・・・・・」
見れば官服を着ている。役人らしい。しかもその服が豪奢であるところを見るとかなり位の高い者達のようだ。

「全くよりによってこのような場所で」
「そなた達も早く何処かへ行き休むがいい。見ていていいものではなかったであろう」
彼等は不思議な響きのするやけに高い声で言う。
三人共髭が無い。そして顔立ちも何処か中性的である。宦官のようだ。
中国だけでなくトルコやエジプト等にいた者達である。皇帝やその妻妾達の身の周りの世話をする為に去勢された男達である。古来より存在していた。
彼等は皇帝の側にいた為時として辣腕を振るった。中には腐敗の中心となった者もいる。
その為に彼等は時として忌み嫌われた。宦官というだけで排斥され殺されたこともある。だがそれでも尚存在し続けた。何故か。皇帝の身の周りを世話するには必要な存在であったからだ。
「ところでお主」
彼等はカラフのところにやって来た。
「先程何と申した？」
そして問い詰める。
「決まったこと。姫に結婚を申し込むのだ」
カラフは毅然として言った。
「またここに愚か者が一人・・・・・・」
彼等は首を横に振って言った。
「さっき何があったのか見ておらぬわけではあるまい」
彼等のうち一人が言った。
「勿論」
カラフはその尊大とも見える態度を崩すことなく言った。
「ならば止めておけ。むざむざ死ぬこともなかろう」
「そうじゃ、折角親からもらった命じゃ、粗末にすることはないぞ」
彼等はカラフを諭す。
「のう、そこの娘、そなたもそう思うであろう？」

彼等はリューに対し問うた。
「はい、お役人様の仰るとおりです」
リューは彼等にすがるようにして言った。
「そうであろう、そなたは心優しい娘じゃ。のう、お主よ」
彼等はカラフの方に再び顔を向けた。

第一幕その四

「この娘もそう申しておる。見たところそこにいるご老人はそなたの父君のようだが親より先に死ぬなどということがあってはならぬぞ」
「そうじゃ、それは一番の親不孝」
「むざむざ首を切られに行ってすることではないぞ」
「いや、それは違う」
カラフは諭す彼等に対して昂然として言った。
「私は草原の狼の子、その高貴なる血が私に力を与えてくれている」
彼は自信に満ちた笑いをたたえて言った。
「その血がある限り私は勝つ。そして姫を手に入れるのだ」
「だから言っておろう、それは愚か者の戯れ言だと」
彼等は呆れたような顔をして言った。
「今までそう言って何人もの者が命を落としている」
「お主もそうはなりたくはないだろう、いい加減に聞き分けよ」
「そんなに行くというのならまずはあれを聞いてからにするがいい」
そう言うと城壁の方を指差した。
「？」
カラフ達は宦官達が指差した方へ顔を向けた。そこは城門の方である。
「そなたも知っている筈だ。あの城門のところに何があるかを」
「勿論」
「ならばあの姿も声も見え聞こえる筈だな」
城門の上の壁に多くの影が現われた。
「あ・・・・・・」
ティムールとリューはそれを見て声を失った。そこに現われた者達の身体は半ば透けていた。そしてその姿は虚ろであったのだ。
亡霊であった。彼等は虚空を見上げていた。

「あれは・・・・・・姫に愛を告白した者達だな」
カラフはそれを見て言った。見れば先程首を刎ねられたあのペルシャの王子もいる。
「そうだ。そして若い命をこの場で落としたのじゃ」
「生きておればまだ多くのことを楽しめたというのにのう・・・・・・」
彼等は悲しそうな声で言った。
「聞くがいい、あの者達の嘆きを」
そこから何かが聞こえてきた。
『ためらうまいぞ、再び姫に会うことは。だが我等は最早この世の者ではない』
彼等は恨めしそうな声で言っている。まるで地の底から響いてくるような声だ。
『もう一度命を与えられたなら再び姫の下へ、そして今度こそ愛を我が手に』
彼等はそう言うと姿を消した。後には蒼白い月だけが残った。
「聞いたか、あの声を」
宦官達はカラフに顔を戻して言った。
「この世にまだ未練があるがああして浮かばれず縛られているのだ。あれ以上の苦しみがあろうか」
「そう、お主もああはなりたくあるまい」
「これでわかったじゃろう。さあ、早く立ち去るがいい」
だがカラフはそれにも耳を貸さなかった。
「素晴らしい、死しても尚愛を忘れぬか」
彼はあの亡霊達の言葉に感嘆して言った。
「なっ！？」
これには宦官達も呆れた。ティムールもリューも驚愕した。
「それ程魅力のある人ならば是非とも手に入れたい。そして我が妻とするのだ」
「・・・・・・・・・」

宦官達は沈黙した。そして再び口を開いた。
「いい加減に人の話を聞かぬか！」
最早完全に激昂していた。
「そうして自分の命を粗末にするなと何度言えばわかるのじゃ！」
彼等は口々にカラフに対して怒鳴りつける。
「そなたには親もいるのだろう、そうして死に急ぐなと言っておるのだ！」
だがカラフはそんな彼等に対しても心を動かされない。
「こちらも何回も言っているだろう、そんな心配は一切不要だと」
「貴様は人の話が理解出来んのか！」
三人は一斉に怒鳴った。そこに宮廷の侍女達が現われた。
「もし」
彼女達は宦官達に対して言葉をかけた。
「ムッ、何じゃ？」
彼等はそちらに顔を向けた。
「姫様はもうお休みですので。あまり叫ばれると」
侍女達は彼等を嗜めに来たのだ。
「おお、そうであった」
彼等は姿勢を正して宮城の方を見た。刑場のすぐ側にもその豪壮な城はあった。
「いかんいかん、危うく我等の首が飛ぶところであった」
彼等は気を鎮めながら言った。
「まだ死にたくはないからの」
「はい、お気をつけあそばせ」
そう言うと侍女達は去っていった。後には再びカラフ達と宦官達が残された。
「成程、あの城に姫がいるのか」
カラフは宮城を見上げて言った。
「そうじゃ、それもすぐそこに姫のお部屋がある」
宦官達は宮城の一部を指差して言った。

「そなたも感じるじゃろう、あの氷の様な冷たさを」
彼等は小声で言った。
「のう、もうわかったじゃろう。姫様は半ばこの世の方ではない」
「そう、仙界に住む神のような不思議な方なのじゃ」
彼等は小声でカラフに対して言った。
「人は女神とは結ばれぬ」
「ただその美しさを遠くから見るだけなのじゃ」
「だから、の・・・・・・」
そして彼等は一息置いてこう言った。
「大人しく諦めるがいい」
しかしカラフはそれでも首を縦には振らなかった。
「そうか、女神か。それはいい」
不敵に笑って上を見上げた。
「益々私に相応しい女だ。是非ともこの手にしなくてはな」
「まだ言うか・・・・・・」
彼等は呆れ果てた声で言った。
「そうだ、姫に求婚することの宣言にはあれを使うのだったな」
カラフはそう言うとその場を足早に立ち去った。
「あっ、お待ち下さい！」
リューとティムールがそれを追う。
「ええい、待つのじゃ！」
宦官達も追う。カラフはそれに構わず刑場の端へ向かった。

第一幕その五

そこにある銅鑼の前に来た。その前には一人の兵士が立っている。
「それを貸してくれ」
カラフはその兵士に対し彼が手に持つ棒を指し示して言った。
「えっ、正気ですか！？」
彼も今までの騒動は端から見ていた。だが本当にやるとは夢にも思っていなかったのだ。
「私は冗談は言わない。さあ、それを早く」
「・・・・・・後悔なさいませんね」
兵士は彼に対して言った。まるで止めるように。
「当然だ。私の生き様に後悔などというものはない」
「・・・・・・わかりました」
彼はその言葉に内心呆れ果てながら棒を手渡した。
「殿下・・・・・・」
そこにリューがようやく追いついてきた。ティムールや宦官達がそれに続く。
「リュー・・・・・・」
カラフは彼女の顔を見た。見れば必死に哀願する顔である。
「殿下、どうか私の言葉をお聞き下さい」
そう言って話しはじめた。
「あの姫の氷の様なお姿とお心を思うだけで私の胸はその恐ろしさで引き裂かれそうです。もし殿下が謎を解かれぬ場合にはあの城壁の上に現われた気の毒な方々と同じ運命を歩まれることでしょう。お願いです、どうか思い留まって下さい！」
そう言うとその場に泣き崩れた。そこにティムールと宦官達がやって来た。
「そうじゃ、その娘の言う通りじゃ」
宦官達は彼に対して言った。

「さあ、早くその棒を捨てよ。そうすればお主は愚かな夢から覚める」
「そして現実の世界へ帰るのじゃ」
彼らはカラフを宥めるように言った。
「・・・・・・いや」
だがカラフはその言葉にも首を横に振った。
「私は現実の世界にいる。今ここに。そして夢をこの世で掴み取るのだ」
そしてリューに顔を向けた。
「リューよ、泣く必要はない。御前の言葉は私の心に染み入る。しかしな」
彼はそこで姫のいる宮城の方を見上げた。
「御前が心配することはないのだ。何故なら私はあの姫のその氷の様な心を溶かす炎なのだからな」
「そんな・・・・・・私の言葉を聞き入れて下さらないのですか？」
リューは顔を見上げてそう言った。カラフはリューに顔を戻した。
「違う。私は勝つ。そのような心配は無用だというのだ」
そしてまた言った。
「御前はただ父上を助けてくれ。いらぬ心配は無用だ」
「お主は本当に人の話が理解できぬのか！？」
宦官達はそんな彼をまだ止めようとする。
「その娘の気持ちがわからぬわけではあるまい。一体それ程までに頑なになって何を求めようというのだ！？」
「愛を」
カラフは答えた。
「命をかけてまでか。まことの意味での愚か者だな」
「いや、それは違う」
カラフはその言葉に対して反論した。
「愛とは命を懸けて手に入れるもの。それだけのものがなければ本当に手に入れたいとは思わない」

「そして他の者を悲しませてもか！？」
「私は勝つ運命、だからそのような心配は無用だと言っているだろう」
カラフは昂然と言い返した。
「だからお主は聞く耳は持っておらんのかと言っておるのじゃ」
「そうじゃ、人の話を何故聞こうとせん」
「それは決まっている」
カラフはまた言った。
「ほう、何がどう決まっているのじゃ！？答えてみよ」
宦官達は彼に対して問うた。
「私が姫を我が手に入れると決めたあらだ。そうとなれば最早他の者の言葉など何の意味もない」
「我が子よ・・・・・・」
ティムールは息子に対して言った。
「もういい加減にするがいい。御前に先立たれたならわしはこれから何を心の支えに生きておればよいのじゃ！？」
「父上、ですからそれは単なる杞憂に過ぎないと先程から」
「もういい、誰かこの男を取り押さえよ」
痺れを切らした宦官達が言った。先程まで銅鑼を持っていた兵士が頷き同僚達を呼びに向かった。
「そのようなことをしても無駄だ」
カラフは彼等を見据えて言った。
「無駄ではない、愚か者の目を覚ますことが出来るのだからな」
彼等は言い返した。
「お主は今夢を見ておる。今それを覚ましてやろう」
先程の兵士が戻ってきた。同僚達を連れている。
彼等はカラフの周りを囲んだ。そして取り押さえようとする。
「さあ、早くその棒を捨てるがいい」
宦官達はカラフに詰め寄った。
「否」

カラフはそれを拒絶した。
「ならば致し方ない。兵士達よ、この愚か者をひっとらえよ！」
「そう、そしてトラ箱で頭を冷やさせよ！」
兵士達がその言葉に頷きカラフに襲い掛かろうとする。だがカラフはそれより先に動いた。
「無駄だと言っておろう！」
そう言うと銅鑼を大きく振るった。
「トゥーーランドォーーーーーット！」
姫の名を叫んで銅鑼を叩いた。その音が夜の街に響いた。
「ああ・・・・・・」
それを見、銅鑼の音を聞いた一同は絶望の声をあげた。
「トゥーーランドォーーーーーット！」
もう一度叫んだ。そして銅鑼を叩く。
「遂にやりおったか・・・・・・」
宦官と兵士達をそれを見て絶望の奥底に落ちた顔で言った。
「自分から地獄に行こうとは・・・・・・」
「早速処刑の準備に取り掛かるとするか」
彼等は首を横に振ってその場を後にした。後にはカラフとティムール、そしてリューが残った。
「さあ、これで私は名乗りを挙げた」
彼は銅鑼を見て不敵に笑った。
「今の音は姫も聞いている筈」
そう言って再び宮城を見上げる。
「その心は私のものに」
「ああ・・・・・・」
ティムールとリューはその下に泣き崩れていた。だがカラフはそれに一瞥すらせずこれからの自身の勝利に想いを馳せていた。

第二幕その一

第二幕　宮城にて

銅鑼の音は街にいる全ての者が聞いた。次の日はそれで話題が持ちきりであった。

「なあ、今度は誰なんだ？」

賑やかな市街の食堂で人々は点心をつまみながら話をしている。

「ああ、何でも韃靼の王子様らしいぞ」

誰かがその言葉に応えた。

「今度は韃靼か。それにしても皆何が悲しくてわざわざ死にに行くんだろうな」

「それは決まっているだろう。姫の美貌に心を奪われたからさ」

麺をすすっていた男が言った。

「それがもとで首を刎ねられるのか。俺だったら絶対しないな」

その隣にいる男がそれに応える。

「まあ御前みたいな鈍感な奴だったらそう言うだろうな」

麺をすする男が皮肉っぽく笑う。

「おい、じゃあそう言う御前はどうなんだよ」

彼は言葉を返した。

「俺？俺は自分から死にに行くようなことはしないぜ」

彼は麺を食べ終えてそう言った。

「まあ普通はそうだろうな。誰も好き好んでそんなことしないって」

街の者達は口々にそう話していた。

それは宮廷においても同じことだった。豪壮なその中では今日の夜に行われるその謎解きの場の設定が行なわれていた。

宮廷の中は金や宝玉で飾られていた。その巨大な内部は灯りもないというのにその光で眩しく照らされていた。

「やれやれ、それにしても忙しいことじゃ」

昨日の夜カラフを必死に止めようとした宦官達がその場の設定の

指揮を執っている。
「全く。おまけに次の日の処刑の準備もせねばならんからな」
彼等は不満を露わにして言う。
「本当に。あの愚か者は一度首から胴が離れんとわからんらしいのお」
「愚かなのは死んでも治らんがのう」
とりあえず一段落した。彼等は休息をとった。
「しかしこの白い棺を作るのは一体何個目だ？」
三人の中の一人がその棺を忌々しげに見ながら言った。
「一昨年の戌の年は六人じゃったな」
「そして昨年の猪の年は八人じゃった。あの頃はまだ良かった」
「ところが今年はもう十三人・・・・・・」
彼等はそこで再び溜息をついた。
「その度に流れる必要もない血が流れ弔いのお経が流れる」
「道師や僧侶達がせわしなく動く」
「それが終わったと思ったらまた愚か者が出て来る。少し前までは平和であったというのに」
彼等は憂いに満ちた顔で言った。
「古より我が国は時には怒り、時には喜び、そして時には楽しんできた。しかしそれは最早遠い昔の世界の話となった」
「姫様がこの世にお生まれになってからな・・・・・・」
そう言ってうなだれる。
「大河に育まれ湖と林を持つ美しい我が国は今は」
「氷の心を持たれる姫に全てを支配されてしまっている」
「あれだけのお美しさをお持ちながら人の心を持たぬ姫君」
「今日も血を欲しておられるのだ」
彼等は誰にも聞こえぬように小声で囁き合った。
「今では我々も首切り役じゃ」
「首切り役人と同じくわし等も死なせる必要のない者達の首を刎ねる日々」

「昔はこうではなかったのに」
そして溜息をついた。
「静かなところで心を落ち着かせて書に親しんでいたあの頃」
「そんな時はもう戻らないのだろうか」
彼等は昔を懐かしむ顔で言った。
「花を見て清らかな泉を見る日々」
「そんな時もあったな」
「それが今どうしてこのようなことになったか」
話す度に憂いが増していく。だが話さずにはおれなかった。
「のう、覚えているか。サマルカンドの王子を」
一人が言った。
「ああ、凛々しい顔立ちの王子だったのう」
他の二人がそれを聞いて懐かしむような顔をする。
「だが首を刎ねられた。ビルマの王子もキルギスの王子も」
「皆生きておればその輝かしい未来が待っておったというのに」
「光眩い宝玉に身を包んだインドの王子もいたな」
「ああ、浅黒い肌が実によく似合っておった」
「ロシアの美しい毛皮を身に纏った王子も死んだ」
「そして今度は韃靼の王子か」
彼等は再び溜息をついた。
「一体何時までこうしたことが続くのじゃ」
後ろから刀を磨く音がする。彼等はそれを暗鬱な表情で聞いている。
「あの刃が刃毀れし折れる時かのう」
「それは一体何時のことじゃ」
「わからぬ。若しかすると永遠なのかも」
「そしてわし等は何時までもこの仕事を続けねばならぬのか」
彼等はうなだれるばかりであった。そうしている間に休息の時間は終わった。
「またやるか」

中央の一人が言った。
「うむ、処刑の準備をのう」
こうして三人は再び仕事をはじめた。こうして夜の謎解きと処刑への準備が整えられていった。
「若しも姫様の氷の心が溶けたなら」
誰もがそれを願った。
「この国は再び明るくなるというのに」
だがそれが叶わぬことであると誰もが思っていた。
「花が咲き蝶が舞う国」
彼等は皆心の中で思い出していた。
「我が国は再びそうなれるというのに」
そうこうしている間に太陽は沈んだ。そして夜となった。

第二幕その二

謎解きは宮殿の前の広場で行なわれることになっている。中央に三つの広い踊り場のある、大きな木の階段がある。そこの左右にある灯に先の三人よりも位のずっと低い若い宦官達が灯りを点けていく。民衆が少しずつ集まり上に文武両官がやって来た。そして彼等の中央に玉座がある。その周りを八人の年老いた大臣達が固めている。

彼等はその手にそれぞれ封をした絹の巻物を持っている。おそらくそこに謎が書かれているのであろう。

「皇帝陛下が来られる、一同頭を下げよ!」

民衆も文武の官達も皆頭を垂れた。銅鑼が鳴り一同が頭を上げた時玉座には皇帝が座していた。

黄色、いや金の衣を身に纏い白い髪に白い髭を生やしている。かなりの高齢であるようだがその姿には威厳がある。そしてその強い目で民衆達を見ている。

「よくぞ集まって来てくれた、我が愛すべき者達よ」

彼は民衆に対して語りかけた。

「陛下に栄光あれ!」

民衆は彼を讃える声を出した。

「その言葉に朕は感謝したい。そして願おう、今日こそこの国に安堵の息が戻って来ることを」

民衆は再び彼を讃えた。その中にはティムールとリューもいる。

「では今日謎に挑む勇敢な若者は何処か」

彼は問うた。

「ここにおります」

彼は階段の中央、階になっている場所に姿を現わした。

「そなたが姫の謎に挑む若者であるな」

「仰せの通りです」

カラフは片膝を着いて答えた。
「そなたもまた我が国の者ではないな」
皇帝はそれを見て言った。
「ハッ、韃靼より来ました」
カラフは答えた。
「そうか・・・・・・」
皇帝はそれを聞き少し哀しげな顔をした。
「顔を上げるがよい」
そしてカラフに対して言った。
「ハッ」
カラフは顔を上げた。
「いい顔をしておるな」
皇帝は彼の顔を見て言った。
「有り難きお言葉」
彼は謹んで答えた。
「だがのう」
皇帝は暗い顔をして何か言おうとした。
「いや、止めておこう」
だが彼は言うのを止めた。
「じきに姫の方から言うであろうからな」
そして口を閉ざしてしまった。
一人の武官が降りて来た。そしてカラフの横を通り過ぎ階段を少し行ったところで止まった。そして懐から一枚の紙を取り出して民衆に対して言った。
「皆の者、よく聞くがいい！」
彼は語りはじめた。
「若者が姫が出される三つの謎を全て解いた時姫は若者の花嫁となられる」
だがそれを聞いても誰も何も反応しなかった。
「しかし」

武官は言葉を続けた。
「若し答えられぬ場合若者は死罪となる。その時は明日の月の出し時である！」
その声を聞き皆下を向いてしまった。リューとティムールは顔を蒼くさせる。皇帝も大臣も他の役人達もその顔は暗い。ただカラフだけが自信に満ちた顔で微笑んでいた。
「もうすぐ姫が来られる。一同下に！」
皇帝を除くその場にいた者全てが頭を垂れる。そして一同が銅鑼の音で頭を上げた時そこにはトゥーランドットがいた。
彼女は皇帝の脇にいた。銀の冠を頭に被りその冠と同じく銀の長い衣を身に纏っている。
そしてその美しい鳳凰の様な黒い瞳でカラフを見下ろしている。その光はあくまで冷たい。
「よくぞ来ました、怖れを知らぬ若者よ」
彼女はカラフを見下ろして言った。
「よくぞ私の出す謎に答えようとここまで来てくれました。礼を言いましょう」
その声は透き通っている。だが冷たく冷気を漂わせている。
「見たところ貴方も異郷より来た者のようですね」
彼女はカラフの顔と服を見て言った。
「それならば遠い昔にこの城で起こった悲劇についてお話しましょう」
彼女はカラフに対し話しはじめた。
「これはもう遠い伝説の時代の話です。この国にロウリン姫という美しい姫がいました」
カラフはその話をジッと聞いている。
「美しいだけでなくその知恵と政はこの国を照らしました。しかしその素晴らしい姫をある日悲劇が起こったのです」
その時トゥーランドットの瞳に憎しみの光が微かに宿った。

第二幕その三

「この都が北の敵に攻められた時姫は捕らえられました。そして敵国の王子に辱められ非業の死を遂げたのです。そう、貴方のような異国の王子に」

「そして姫は幼い日にその話をお聞きになり激しい怒りを覚えられたという」

民衆がそれを聞いて言った。

「私は心に決めたのです。敬愛するロウリン姫の仇を討たんと」

カラフを見据えた。

「私に愛を告白する異国の若者達の命を奪いそれを姫に捧げることにしたのです。姫の無念が癒さぬ限り私は異国の者達の命を姫に捧げ続けることでしょう」

「それは永遠に続くであろう・・・・・・」

皇帝は哀しげな声で呟いた。

「姫よ、それは違う」

カラフはトゥーランドットに対して言った。

「貴女は怖れているだけなのだ」

「怖れ？私が？」

トゥーランドットはそれを聞いてカラフの顔を見た。

「そうだ、貴女は愛を知ることを怯えている。だからこそそうして異国の若者達の命を奪っているのだ。ロウリン姫の話は貴女のこじつけに過ぎない」

「・・・・・・・・・」

トゥーランドットはそれを沈黙して聞いていた。

「そしてそれが終わる時が遂に来たのだ。私がその謎を全て解き貴女に愛を教えてあげよう」

「・・・・・・口では何とも言えますね」

彼女はそれを聞いて冷酷な声で言った。

「しかし謎を解いた者は今まで一人もおりませぬ。貴方もまた月が姿を現わすと共に死ぬ運命」
「それは違う」
カラフはトゥーランドットの言葉に対して言った。
「今からそれをお見せしよう」
「全く変わらん。何という愚か者じゃ」
皇帝や大臣達の側にいる三人の宦官達はそれを見て溜息混じりに呟いた。
「では勇気ある異国の若者よ、貴方に問うと致しましょう」
トゥーランドットはカラフを見下ろして言った。
そして大臣の一人から絹の巻物を受け取った。そして読み上げる。
「闇を照らすが幻の様に捕らえる事が出来ず悲しい心に明るい光を注ぐ。人々はこれにすがり、求める。消えようとも必ず再び現われる。夜に生まれ朝に死す。さあ、これは何か」
そう言い終わるとカラフを見下ろした。
「それは・・・・・・」
カラフはトゥーランドットを見据えた。民衆も役人達も固唾を飲んだ。
「答えてくれよ」
ティムールは心の中で祈った。リューは目を閉じ固く祈る。
「それこが我々が常に心に留め己が心を照らしているもの、希望だ！」
彼は叫んだ。
「・・・・・・その通り」
彼女は答えた。民衆がそれを聞き歓声をあげる。役人達も皇帝もホッと胸を撫で下ろす。ティムールとリューは自分達が死の淵から生還したような顔になった。
「静まりなさい」
トゥーランドットは言った。皆その声に静まり返った。
「これはほんの偶然に過ぎません」

そう言うと階段をゆっくりと降りた。皇帝のいる場とカラフの中間のところで止まった。長い衣が階段にまで垂れている。
「今度こそ貴方の命が落ちる時」
そして口を開いた。
「炎の様に燃え盛るが炎ではなくある時には思わず我を忘れて賢き者も愚かな者もそれに悩み心は燃え盛り続ける。それが為に身も打ち振るい紅に燃える。それは何か」
「・・・・・・・・・」
カラフは沈黙してトゥーランドットを見据えた。
「さあ、答えなさい」
トゥーランドットはカラフに対して言った。
「若者よ、答えよ。さもないと命がないぞ！」
民衆は完全にカラフの側に立って言った。
「若者よ、さあ早く」
皇帝も彼に対して言った。他の者も同じであった。
「それは皆が持っている者だ」
カラフはトゥーランドットを見据えたまま毅然として言った。
「どの様な冷たい心の持ち主でもそれは持っている。それは血潮だ、激しい血潮だ！」
トゥーランドットはその言葉に対し大臣達の方を振り返った。彼等のうち一人の巻物がゆっくりと開かれる。
「その通りです」
その大臣は静かに答えた。
「よし、あと一つだ！」
民衆はそれを聞き叫んだ。
「若者よ、もう少しだぞ！」
ティムールもリューも顔を明るくさせた。だがそれは一瞬であった。
トゥーランドットが下を一瞥した。皆その冷たい眼差しの前に沈黙してしまった。

「成程、貴方は知恵も備えておられるようですね」
そう言うとゆっくりと下に降りだした。
「しかしそれも生半可なものでは持っていないのと同じ。そう、そしてそれは結局貴方の命を助けることにはならないのです」
そしてカラフのところに降りてきた。
「それでは最後の謎です。これで貴方の運命が決まります」
カラフの横に来て言った。驚く程整った美貌だ。
しかしそれは氷の美貌であった。冷たく、人が持っている筈の温かみなど何処にもない美貌であった。
カラフはその顔を見た。彼女の顔は丁度自分の顔の位置にあった。
（この顔に人の心が宿ったならば）
彼はふと考えた。
（一体どれ程美しいのだろう）
心の中でそう考えた。そして心を奮い立たせた。
「それでは答えなさい」
彼女は周りを凍らせるような冷たい声で言った。
「炎より生まれ氷より冷たい。それは貴方を助けこの国の主とするのも貴方の命を奪い月に捧げるのも思うまま。見ればそれを聞いただけで貴方の顔は青くなった」
カラフはそれを黙って聞いていた。
「全ての望みが絶たれた貴方にお聞きしましょう。この炎より生まれ氷より冷たいものとは一体何か」
「炎より出て氷より冷たい！？そんなものある筈ないだろう！」
民衆がそれを聞いて言った。
「駄目だ、やっぱり駄目なんだ！」
「静まりなさい、民衆達よ」
彼女は民衆達に対して言った。
「そなた達はただ黙って見ていればいいのです。この若者が命を失うところを」
「・・・・・・・・・・」

民衆達はその言葉の前に沈黙した。皇帝や役人、ティムールやリューも同じであった。

「殿下・・・・・・」

リューはカラフが答えてくれることを祈った。目を閉じその場に跪く。

第二幕その四

「炎より生まれ氷より冷たきもの・・・・・・」
カラフは少し俯き考え込む顔でそう呟いた。
「私を助けられるが私の命をも左右出来るもの・・・・・・・」
「そうです、流石に答えられぬでしょう」
トゥーランドットは少し勝ち誇った様な顔と声で言った。
「さあ、負けを認めなさい」
「いや、私は決して負けない」
カラフは毅然として言った。
「何故ならその答えは今私の心の中にあるからだ」
「それは何だ！？」
民衆はカラフの言葉に対して問うた。
「それは姫よ、貴方だ」
カラフはトゥーランドットを見据えて言った。
「本来は炎より熱き心を持っているがそれを必死に覆い隠し氷の仮面を被っている。私に幸福を与えることも出来るが同時に死を与えることも出来る。それは貴女をおいて他にいない！」
「！」
トゥーランドットはそれを聞きはじめてその表情を変えた。驚愕したものであった。
そして上の方を振り向く。大臣達の持つ巻物の一つがゆっくりと開かれる。
「その通りです！」
今度は大臣達が一斉に叫んだ。皆それを聞き大きな歓声をあげた。
「やったぞ、遂に謎が解かれたんだ！」
「若者よ、貴方は今勝利を収めたんだ！」
民衆達が叫ぶ。役人や皇帝達も微笑んでいる。
「まさか本当にやりおるとは・・・・・・」

「ただの愚か者ではなかったようじゃ・・・・・・」
三人の宦官達も思わず感嘆の声を漏らした。カラフはそれを勝ち誇った声で聞いていた。
「やりおったな・・・・・・」
ティムールがホッとした顔で言った。
「殿下、おめでとうございます・・・・・・」
リューは胸を撫で下ろして言った。その声には何処か寂しさが漂っていた。
「これで全ては決まった」
皇帝は玉座から立ち上がって言った。
「若者よ、姫はそなたのものとなった」
民衆はそれを聞いてさらに歓声をあげた。だがトゥーランドットは蒼い顔をして父の側に走り寄った。
「お父様、お待ち下さい！」
父である皇帝の前に跪いて言った。
「私は見知らぬ男の妻になどなりたくはありません！」
今までの冷酷で傲岸な物腰が嘘のようであった。それは明らかに何かに怯える女性の姿であった。
「それはならん」
皇帝は峻厳な声で娘に対し言った。
「そなたは一国の、しかもこの中国の姫なのだぞ」
その声はまるで天からの声の様にその場を圧した。
「そんな、その様なことは・・・・・・」
トゥーランドットは蒼い顔で言った。
「私は永遠に処女であるべき存在、あの様な男の妻になれなどと・・・・・」
彼女は顔を蒼くさせたまま言う。
「私をこの世の他の女達と一緒に扱うなどと・・・・・・」
「そうだ、そなたもこの世の女なのだ。他の誰とも変わらない」
「いえ、それは違います！」

彼女は父のその言葉に対あがらった。そして立ち上がりカラフを見下ろした。その目には激しい憎しみの炎が宿っている。
「私はあの男の心が見える。その黒い瞳には私を侮蔑する光が宿っている。私もまた一人の女に過ぎないのだと」
カラフはそれに答えない。ただトゥーランドットを見上げているだけである。
「だが私は違う、私はロウリン姫がこの世に生まれ変わった存在、誰も私を辱めることも触れることも出来ないのだ！」
「姫よ、もうたいがいにせぬか！」
皇帝はそんな娘を叱った。玉座から立つ。
「誓いを守れというのだ！そなたも誇りがあるならそれを守れ！」
「嫌です！」
彼女は感情を露わにして叫んだ。
「私は誰のものにもなりたくない、私は誇りを傷つけられるのは嫌です」
「しかしそなたは言ったではないか、謎を解いた者の妻になると」
「しかしそれは・・・・・・」
トゥーランドットは弱り果てていた。民衆も役人達を彼女から目を離さなかった。
「私はこの身を誰にもわたしたくはない、私以外の誰にも」
「姫よ」
ここでカラフが口を開いた。
「私の願いをお聞き届け下さい」
静かに語り掛ける様に言った。
「そんな・・・・・・」
彼女は蒼い顔でカラフを見た。
「私は貴女が出した三つの謎を全て解いた。今度は貴女の番です」
「しかし・・・・・・」
トゥーランドットは動けなかった。最早その身体を震わせるだけであった。

「姫よ、いい加減にするのだ。その若者の言う通りにせよ」
「けれど・・・・・・」
彼女は最早言葉を発することすら出来なくなりつつあった。
「ならば姫よ、私も貴女に謎を出そう」
カラフはトゥーランドットを見上げて言った。
「何っ！？」
これには皆驚いた。カラフは言葉を続けた。
「私の名を答えて下さい。朝日が昇るまでに。もし答えることが出来れば私の命は貴女に差し上げましょう」
「若者よ、その言葉本気か！？」
皇帝はその言葉を聞いて思わず声をあげた。
「私は嘘は言いません」
カラフは強く頷きながら言った。そして階段に足をかけた。
ゆっくりと登っていく。そしてトゥーランドットの側に来た。
「今よりその謎解きははじまります。姫よ、私の謎解きに答えていただけますね」
トゥーランドットは一言も発さず頷いた。
「よろしい」
カラフはそれを見て言った。
「私の名を答えられなければ貴女は私の妻に、答えられれば私の命は貴女のもの。今それを宣言しましょう！」
民衆はそれを聞き大いに叫んだ。こうして再び謎解きがはじまった。

第三幕その一

第三幕　秘密の名

カラフの名、それは誰も知らなかった。そのことに怖れをなしたトゥーランドットはすぐさま街におふれを出した。

『あの若者の名を知らせた者に報償を与える』

その報償とは山の様な宝玉。誰もがそれを見て目の色を変えた。皆眠ることなく彼の名を探し求めた。だがそれでも尚誰も知らなかった。

「良いか、誰も寝てはならんぞ！」

役人達の声が宮城にまで聞こえて来る。

「探し出した者には報償が待っておるぞ！」

どの者も血眼になっている。そして彼の名を懸命に探し求めている。

「今夜は誰も寝てはならぬ、名を知るまでは！」

そして夜の街は喧騒に包まれていた。

「私の名を探し求めているのか」

カラフはそれを市内の庭園で聞いていた。本来は静かなこの庭園も今は騒ぎ声が聞こえて来る。

夜の中に緑の木々と花々が月の光に照らし出されている。池には蓮の花の間にその黄色い月が浮かんでいる。

「誰も寝てはならぬ、そう今は誰も寝てはならない」

カラフは空の月を見上げて言った。星達も輝いている。

「それは姫よ、貴女もそうなのだ」

彼は月に対し語り掛けるようにして言った。

「貴女は今その冷たい氷に被われた様な部屋で一人怯えている。私の名を知ることが出来なかったならどうなることかと」

言葉を続ける。

「貴女は知ることは決して出来ない。何故ならその名は私の心の中

に固く閉じ込められているから」
一瞬顔を伏せた。だが再び夜の空を見上げた。
「朝が来た時に私は言おう、貴女のその氷の様な心を溶かす為に。そして私の口づけは貴女のその心を完全に溶かすだろう」
「誰も謎を知ることは出来ないのでしょうか。私達はあの宝玉を手に入れることは出来ないのでしょうか」
遠くから宝玉を欲する女達の声がする。
「宝玉など愛の前には如何程の価値があろうか」
カラフは毅然として言った。
「さあ月よ、沈むがいい。星よ、消え去るのだ！朝よ私の下へ。私は勝利を収めるのだ！」
その時遠くから男達の声が聞こえて来た。
「若者よ、勝利をその手に掴むのか。愛を手に入れよ！」
カラフに心を寄せる者も多くいた。街は今宝玉を求める者と彼の勝利を願う者の両方がいた。
「おい、いい加減に他の者に迷惑をかけるのは止めよ」
宦官三人組がカラフの前にやって来た。彼等は前者であるようだ。
「何がだ？」
カラフは毅然とした態度で彼等に対して言った。
「どうしてそう揉め事ばかり起こすのじゃ」
彼等は顔を顰めて言った。
「そうじゃ、人を困らせるのがお主の趣味か」
彼等は口々にそう言った。
「生憎だが私にそんな趣味はない」
カラフは態度を変えることなく彼等に対して言った。
「私はただ愛を勝ち取らんとしているだけだ」
「だからそれが迷惑なのじゃ」
「お主は周りが目に入らんのか」
「私は人の目など気にはしない。ただ姫の愛を手に入れんと欲するのみ」

彼は強い口調で言った。
「だからそれが迷惑なのじゃと言っておろうが」
「幾ら頭の回転が早くとも人の話を聞かんのでは意味がないぞ」
「私は人の言葉など意に介さない。ただ己が信念を貫くのみ」
「どうやらお主は本当に愚か者のようだの」
彼等はこれで何度目かわからないが心底呆れ果てた顔で彼に対し言った。
「まあそれもそうだろうがな。命をかけておるのだから」
「だがのう、わし等とて宝玉は欲しいのじゃ」
「宝玉！？そんなもの愛の前には何の価値もない」
カラフは首を右に振って言った。
「お主にとってはのう。だが他の者にとっては違うのじゃ」
彼等はカラフに対して言った。
「わし等は宝石が欲しい、この気持ちがわかるじゃろう」
「命のことなら問題ない。陛下が姫を抑えて下さる。だから、な」
「その名前をわし等に教えてくれるだけでよいのじゃ」
「いや、それは出来ない」
カラフは相変わらずの態度で答えた。
「私は姫に勝負を挑んでいるのだ。謎解きで。その勝負を投げ出すことは出来ない」
「わし等がこんなに頼んでもか！？」
「そうだ」
「命を保証すると言ってもか！？」
「命など問題ではないのだ」
「それでは何が望みなのだ！？」
それはカラフにとっては愚問であった。
「愛だけだ」
一言で言った。
「私にとってはそれ以外のものは何の価値もないものだ」
「そうか・・・・・・」

宦官達はそれを聞いてガックリと肩を落とした。
「もうよい。お主には聞かぬ」
「勝手にせい。そして愛なり何でも手に入れるがいい」
そう言うとその場をあとにした。

第三幕その二

「行ったか」
カラフはそれを見送りながら言った。
「宝石など所詮は見せかけの宝。本当の宝は一つしかない」
彼は月を見上げて言った。
「そしてそれはもうすぐ手に入る」
そう言うとその場を後にしようとした。だがその時だった。
「いたぞ、あそこだ！」
不意に民衆の声がした。
「また来たか」
カラフは先程の宦官達と同じ輩だと思った。そしてそれは当たっていた。
「幾ら何を言われても私には無駄だというのに」
民衆達がやって来た。そしてカラフを取り囲む。
「名を名乗れ！」
「私が勝利を収めた時にな」
カラフは民衆達と対峙して言った。
「ふざけるな、今名乗れ！」
「そうだ、そして宝石は俺達のものだ！」
見れば先程カラフの謎解きに喝采を送っていた者までいる。彼はそれを見て人の浅ましさを見る思いだった。
（だがこれも人の業の一つか）
彼はそれを卑しいと思ったが口には出さなかった。自分がそうでないのならばそれでよかった。
「そんなに宝が好きか」
カラフは彼等に対して言った。
「当たり前だ！」
民衆は彼に対して叫んだ。

「そうか」
彼はそれを聞き頷いた。
「ならば貴方達も愛を知ることだ。それこそが人にとって唯一つの宝だからだ」
そう言い残すと庭園を後にした。
「クソッ、何という奴だ」
民衆は彼を憎しみの目で見ながら言った。
「あくまでああやって我を通すつもりか」
つい先程まで彼が謎を解くのを喜んでいた者達が今は彼を憎しみの目で見ている。最早彼等の目には山のような宝玉しか目に入らなくなってしまっていた。
「おい、もう丑三つ時だぞ。朝まで時間がない」
その中の一人が月を見上げて言った。
「ああ、そうだな。だが月を元に戻すなんて神様でもない限り不可能だ」
彼等はその月を忌々しげに見上げて言った。同じ月を見上げるのでもカラフのそれとは全く違っていた。
「諦めるか？」
「あの宝玉をか？馬鹿を言うな」
そうであった。彼等は宝を諦めるつもりは毛頭なかった。
「ではどうする？」
「どうすると言われても・・・・・・」
彼等は首を突き付け合って相談している。
「あの男の口を開くのは無理だぞ」
「そうだな、例え殺されようとも口を開かんだろう」
彼等は顔を顰めて話し合った。
「待て、あの男にいつもついている二人がいたな」
誰かがティムールとリューのことに気付いた。
「ああ、あの胡服を着た爺様と女の子か」
そのうちの一人がそれに頷いて言った。

「そうだ、あの二人なら知ってるんじゃないか」
彼等はその声にニンマリとした。
「そうだな、何もあの男に聞く必要はない」
彼等は口々にそう言った。
「あの二人から聞き出せばそれでいい話だ」
そして庭園を後にした。
「もう少しですね」
庭園を去ったカラフは先程謎解きが行なわれた階段の前にいた。
そしてそこで彼を応援する者達と共にいた。
「そうだな、もうすぐ月が沈む」
彼は月を見上げて言った。
「そして姫はこの私のものとなるのだ」
「はい、そして姫様はその氷の様な心を溶かされるのです」
「貴方の熱い心によって」
彼等は口々にカラフを褒め称える。彼等は宝玉よりもカラフの心を選んだのだ。
「姫よ、もうすぐだ」
カラフは宮城に顔を向けて言った。
「貴女は私のものとなるのだ」
「そう上手くいくかな」
ここで何者かの声がした。
「何っ！？」
それは入口から聞こえてきた。カラフはそちらに顔を向けた。
見れば先程庭園で彼を問い詰めた民衆達が皆手に得物を持っている。
「あんたの名前を今ここで知ることになるんだからな」
見れば宦官達もいる。そしてそこには父と彼女もいた。
ティムールとリューは身体を左右から押さえられていた。そして周囲にこずかれながらこちらに引き立てられて来る。
「貴様等、一体何のつもりだ！？」

カラフはその顔を蒼白にさせて彼等に向かおうとする。彼を支持する者達もそれに従った。
「おっと、動くなよ」
だが彼等は二人に得物を突き付けて彼に対し言った。
「少しでも動けばこの二人がどうなっても知らねえぞ」
「クッ・・・・・・」
カラフはその卑しい笑みと言葉を聞いて歯噛みしたが動くことは出来なかった。やはり父とリューが心配であったからだ。
「さあ言え、あの男の名は何という」
民衆は二人に対して問うた。
「止めろ、その二人は関係ない」
カラフは彼等に対して言った。
「そんなわけないだろう」
彼等はそんな彼を嘲笑して言った。
「そうだ、この二人があんたの名を知らない筈はないからな」
「クッ・・・・・・」
その通りだった。父や側に仕える者がその名を知らないなど考えられないことなのだから。
「ほら言え、言ったら解放してやるぞ」
彼等は二人に対して言った。
「誰がお主等なぞに・・・・・・」
ティムールは彼等を蔑む目で見てそう言った。
「殿下、私達のことにはお構いなく」
リューは弱々しい声でカラフに対し言った。
「しかし・・・・・・」
そんな二人を見捨てられるカラフではなかった。彼は苦悩した面持ちで二人を見た。
「ほう、秘密を知っている者ですか」
そこで上からあの氷の様な声が響いてきた。
「その声はっ！」

一同その声がした階段の頂上を見上げた。
そこに彼女はいた。トゥーランドットは侍女達を従え冷たい眼で皆を見下ろしていた。
「ははーーーーーっ！」
民衆も宦官達もその場に畏まる。ただカラフだけが彼女を見据えていた。

第三幕その三

「まさかこれ程簡単に謎を知ることが出来るとは思いもよりませんでした」
トゥーランドットはそう言いながら階段をゆっくりと降りてきた。
「ですがこれも天の神々の思召。私に謎を解けという」
そしてカラフ達の前に降りて来た。カラフはその白い顔を見た。
「無謀な若者よ」
彼女はカラフに顔を向けて言った。
「今貴方の命が尽きる。覚悟はよろしいですね」
「・・・・・・・・・」
カラフはトゥーランドットを見据えた。だが言葉を発することは出来なかった。
死ぬのは怖れはしなかった。ただ愛を、勝利を手に入れることが出来ないことだけが心残りなのだ。
「その顔も今は蒼ざめている」
「・・・・・・・・・」
カラフはやはり言葉を発せられない。負けたのか。いや、彼の意志はそれを許さなかった。
「いや、違う」
カラフは口を開いた。
「私は貴女を必ず手にする」
毅然として言い返した。
「この期に及んでまだそのようなことを」
トゥーランドットはその整った唇に微かに冷笑を浮かべてそう言った。
「貴方の謎を私は今知ろうとしているというのに」
「それは出来ない。何故なら私の名は誰も知らないからだ」
カラフはその冷笑に気圧されることなくそう言った。

「相変わらず気の強いこと」
彼女はそれに対して再び冷笑した。
「だがその強気も何時まで続くことか」
そう言うとティムールとリューに顔を向けた。
「貴方に聞かずともこの二人に聞けばいいだけだというのに」
「まさか・・・・・・」
それを見てカラフと彼を支持する者達は顔を蒼ざめさせた。
「さあ、言いなさい。この若者の名を」
トゥーランドットは二人を見据えて言った。まるで全てを圧する様な目であった。
「それは・・・・・・」
リューはその目に気圧されそうになった。だが必死にそれに打ち勝とうとする。
「答えなさい」
トゥーランドットはさらに言った。
「娘さん、言うんじゃない！」
カラフを応援する市民達が彼女に対して言った。
「そうだ、あんたも辛いだろうがここは耐えてくれ！」
「お黙りなさい！」
しかしそんな彼等をトゥーランドットが一喝した。その冷たい声と目を見て一同は沈黙してしまった。
「この世で私を意のままに出来るものはない。例えあの月でさえも」
月は黄金色の光を放っている。彼女はそれを満足気に見た。
「答えなさい。知っているのか知らないのか」
彼女は再びリューに対して問うた。
「知っています・・・・・・」
リューは力ない声で答えた。
「よろしい」
トゥーランドットはそれを聞くと口の両端を微かにほころばせた。
「けれど・・・・・・」

リューは一瞬顔を右下に伏せた。そして再びトゥーランドットの顔を見上げた。
「しかしその名は決して言いません。それは私の胸の中に深く秘めておきます」
懸命に振り絞る様に言った。
「まだそのようなことを」
トゥーランドットはその細い整った眉を顰めた。
「ならばその身に聞くまで」
右手をサッと上げた。それは肩のところで止まった。すると兵士達が動いた。
「止めろ、罪の無い者に何をする！」
カラフはリューの前に出て彼女を守ろうとする。しかしそれは叶わなかった。
「捕らえなさい」
トゥーランドットは兵士達に対して言った。彼等はすぐにカラフを捕らえた。
「くっ、離せ！」
「殿下！」
カラフはそれを必死に振り解こうとする。リューは彼のそんな姿を見て思わず叫んだ。
「さあ言うのです」
リューは兵士達に押さえられた。そしてトゥーランドットに詰問される。
「言いません！」
リューは叫んだ。
「やりなさい」
トゥーランドットは兵士達に対して言った。羽交い絞めにしている兵士が彼女の腕をねじ上げた。
「ああっ！」
リューは悲鳴を上げた。

「止めろ、そんなことをして何になる！」
カラフは捕らえられながらもまだ言った。
「そうじゃ、やるならこの老いぼれをやるがいい！」
ティムールが叫んだ。だがトゥーランドットの詰問は続いた。
「言いなさい」
彼女の冷たい詰問は続いた。
「言えば貴女は解放されるのですよ」
他の者は何も言えなかった。皆トゥーランドットに気圧され沈黙してしまっていたのだ。
「もう耐えられない・・・・・・」
リューは額から汗を流しながら言った。
「終わりのようですね」
トゥーランドットはそれを聞いて氷の様に冷たい微笑を浮かべた。

第三幕その四

「いえ、絶対に言うことなど！」
「やりなさい」
再びリューの腕が締め上げられた。
「ああっ！」
「それにしても何故これ程までに耐えるのか。一体何がこの娘を支えているのか」
トゥーランドットは不思議そうにリューを見て言った。
「姫様、貴女にはおわかりにならないでしょう」
リューはトゥーランドットを見据えて言った。
「それは人を想う気持ちなのです」
「何っ、リュー・・・・・・」
カラフはこの時はじめて彼女の気持ちに気付いた。
「人を想う気持ち・・・・・・」
トゥーランドットはその言葉を呟いた。
「そうです。そしてその強さもおわかりにならないでしょう」
リューは彼女を見据えたまま言う。
「私の気持ちはただ一つ、その為に今まで生きてきました。ですがそれもここまで。私はこの想いを姫様、貴女にお譲り致します」
「・・・・・・・・」
トゥーランドットはそれを黙して聞いていた。
「殿下、お幸せに」
兵士達の手が緩んでいた。リューはそれを振り解いた。
「あっ！」
そしてそのうちの一人から刀を奪い取るとそれで自らの胸を突き刺した。
「リュー！」
カラフはそれを見て思わず叫んだ。

「何ということを！」
それを見た民衆も宦官達も口々に叫んだ。
「姫様、その氷の様に凍てついた心も殿下の想いの前には無力です。すぐに溶けその下から真の心が出て来るでしょう。それを怖れずに。そして貴女が真の幸福にお目覚めになることを祈ります」
「リュー、もういい。それ以上は言うな」
カラフはリューに対して言った。
「殿下・・・・・・」
リューはカラフを見て微笑んだ。その口から血が流れ出た。
「お別れの時が来ました。ずっとお側にいたかったのですがそれは叶えられなくなりました。けれど・・・・・・」
「けれど・・・・・・」
カラフは彼女から目を離さなかった。
「私のことをずっと忘れずにいて下さい。それだけで私は満足です」
「誰がそなたを忘れられようか。私は何時までもそなたのその心を己がうちに留めておく」
「その一言だけで私は満足です・・・・・・」
そう言うとその場に倒れ伏した。
「夜が明けようとしていますね」
見れば空が次第に白くなりだしている。
「私も消えるとしましょう。夜明けの星と一緒に」
そう言うとゆっくりと目を閉じだした。
「殿下、末永くお幸せに・・・・・・」
そしてリューは息絶えた。
「リュー・・・・・・」
兵士達はカラフから手を離していた。彼はリューの遺体に歩み寄り抱き締めた。
「折角朝が来ようとしているのに・・・・・・」
ティムールも彼女の亡骸を抱いて泣いた。
「今までご苦労だった。もうそなたを苦しめる者はいない。だから・

・・・・・」
彼はリューに語りかけるようにして言った。
「よくお休み。そして生まれ変わり再び会おうぞ」
民衆が彼等の周りを取り囲んだ。カラフを支持していた者達だけではない。つい先程まで宝玉に目が眩んでいた者達も宦官達も、そして彼女を責め苛んでいた兵士達もその中にいた。
「気の毒な娘・・・・・・」
リューを見て誰かが言った。
「せめてあの世では幸せにな」
彼等は自分達の先程までの姿がたまらなく卑しく思えた。そして良心の呵責に攻められた。
「葬ってやろう」
宦官達が言った。
「そうだな。手厚くな」
そう言うとリューの遺体を持った。そしてティムールと共にその場を後にした。
「リュー、あの世ではせめて幸せに」
哀しい声が木霊していた。
「リュー、済まない」
後にはカラフとトゥーランドットだけが残った。彼はリューの遺体が運ばれていくのを見送りながら言った。
「もっと早くそなたの気持ちに気付いていれば・・・・・・」
彼もまた悔悟していた。自身の愚かさがリューを死なせてしまったと感じていた。
「だがそなたのことは忘れぬ。そしてそなたの想い、この身に受けよう」
そう言うとトゥーランドットと向かい合った。
「姫よ」
彼はトゥーランドットに対し声をかけた。
「リューに誓った。私は貴女の心を溶かしてみせる」

「何を戯言を」
彼女はカラフを睨み付けて言った。
「私はあのロウリン姫の生まれ変わり。私を穢すことは誰にも出来ない」
「違う、私は貴女を穢すのではない」
カラフは反論した。
「私は貴女のその氷の様な心を溶かす太陽なのだ。そして」
カラフは言葉を続けた。
「貴女はロウリン姫ではない。貴女は貴女、それ以外の何者でもない」
「いえ、それは違うわ」
彼女はそれでも尚カラフを睨んで言った。
「私のこの心は誰にも支配されない。何故なら私は永遠に清いままなのだから」
「そう、貴女の心は永遠に清らかなままだろう」
カラフはそれに対して言った。
「だが愛を知らないだけだ」
「愛。口を開けばその言葉ばかり」
彼女はうんざりしたように言った。
「そんなものがこの世にある筈がないというのに」
「それは違います。あるのです」
「では何処に！？」
「私のこの胸に」
カラフは一歩前に出て言った。
「では見せて御覧なさい」
トゥーランドットは言った。
「よろしいのですか？」
カラフは身構えるようにして問うた。
「ええ。貴方のその胸の中にあるもの、それが真のものならば」
嘲笑するように言った。そんなものがある筈がないと確信してい

たからだ。
「ならば」
カラフは歩み寄った。そしてトゥーランドットを抱き寄せた。
「無礼者、何をするのですか！」
彼女はそれに対して叫んだ。
「貴女は仰いました。私の胸の中にあるこの熱いものを見たいと」
カラフはトゥーランドットの顔を覗き込んで言った。
「それが何故！」
彼女は彼を睨み返して叫んだ。
「これがその熱いものなのです！」
そう言うと彼女の唇に自分の唇を重ね合わせた。
「あ・・・・・・！」
トゥーランドットは叫んだ。だがそれはすぐに掻き消された。

第三幕その五

それは一瞬であった。カラフはトゥーランドットから唇を離した。
「ああ・・・・・・」
彼女は強張っていた。カラフの唇が離れてもまだ震えていた。
「これは一体・・・・・・・」
トゥーランドットはようやく言葉を発した。
「姫よ、これこそが我が胸にあったものです」
カラフは彼女を見据えて言った。
「これこそが愛、それが今貴女の氷の様な心を溶かしましょう」
「そんなことが・・・・・・」
トゥーランドットはまだ震えている。そして必死にそれにあがらおうとする。
「あがらおうとしても無駄なこと」
カラフはそれを見て言った。
「何故ならこれは貴女が怖れ、待ち望んでいたことなのだから」
「戯れ言を・・・・・・」
だがそれが戯れ言であると否定は出来なかった。
「戯れ言ではありません。それは貴女が最もよくお解りの筈です」
「ああ・・・・・・」
カラフはトゥーランドットの側にいた。そして彼女を見守っている。
「さあ、今こそご自身の心を開かれるのです」
「いえ、私の心は既に・・・・・・」
反論しようとする。だが出来なかった。
「そう、既に溶けようとしているのです」
カラフは言った。その通りであった。
「そんな、私の心が溶けるなどと・・・・・・」
空は次第に白くなっていく。それはまるで彼女の今の心を表すか

のようであった。
「闇が晴れました」
カラフはその空を見上げて言った。
「遂に朝となったぞ！」
そこでそれまでカラフの名を探し求め今はリューを弔っている者達もカラフを支持していた者達も思わず声をあげた。
「あの若者が勝利を収めたのだ！」
「そう、私は勝った」
カラフはそれを聞いて呟く様に言った。
「そんな・・・・・・」
それを聞いたトゥーランドットは絶望しきった顔になった。
「そう、月も星も消え去った。夜の帳は最早空にはない」
カラフはトゥーランドットに話しかけるようにして言った。
「私はもう終わりなのね・・・・・・」
彼女はそう言うとその場に両手をついてうなだれた。
「姫よ、それは違います」
カラフは彼女に言った。
「そんな慰めなど・・・・・・」
彼女は首を横に振って言った。
「今の私はただの弱い女・・・・・・」
「人は皆弱いものなのです」
カラフはそれに対して言った。
「ですがその弱さを知り克服出来るのも人間なのです。愛によって」
「愛で・・・・・・」
「そう。人は愛により結ばれ互いを助け合います。そして弱さを克服するのです」
「そんなことが出来るのでしょうか・・・・・・」
トゥーランドットは顔を上げた。そして弱々しい声でカラフに対して言った。
「出来ます。貴女は愛を知るべき人なのです」

「私が・・・・・・」
「そう、先程私は貴女は終わってはいないと言いました。何故なら今から始まるのですから」
「何が・・・・・・」
「愛に包まれた世界がです！」
カラフは叫ぶ様にい力強い声で言った。
「貴女のその閉じられた心は開かれようとしております。そして今私は貴女のその愛を手に入れようとしているのです！」
「私の愛を・・・・・・」
「そうです。私は貴女を愛する。そして貴女も私を愛するのです」
「そのようなことが出来るでしょうか」
「出来ます。ならば私の秘めた謎を今貴女にお教えしましょう」
「それはなりません」
トゥーランドットはゆっくりと立ち上がりながら言った。
「貴方は勝利を収めたのです。今秘密を明かしてもそれは命を無駄に捨てるだけのことです。それに最早時は過ぎました」
「時はまだ過ぎてはおりません。日が昇るその時までは朝が来たとは言えません」
カラフは言った。
「愛する者に対し隠し事があってはなりません。今貴女に私の名を教えましょう」
トゥーランドットはその言葉に固唾を飲んだ。
「私の名はカラフ、韃靼の王子カラフです」
「カラフ・・・・・・」
トゥーランドットはその名を口ずさんだ。
「そうです。この名をお教えした意味がおわかりでしょう」
カラフはトゥーランドットを見て言った。

第三幕その六

「私の命は今貴女に預けられたのです」
「私に・・・・・・」
「そう。愛する者に私は命をも預けましょう。そしてその為に例え命を落としても惜しくはありません」
「それが愛なのでしょうか・・・・・・」
トゥーランドットは問うた。
「その通りです」
カラフは力強い声で言った。
「たった今より私の命は貴女に差し上げます。私を愛するのも殺すのも貴女次第です」
「私次第・・・・・・」
「そうです。私は愛により生き愛により死にます。それが私の運命です」
「・・・・・・・・・」
トゥーランドットはそれを聞き沈黙してしまった。
「では私はこれで。リューのところに行きます故」
彼はそう言うとその場を立ち去ろうとした。
「今日の夜に私は貴女のところへ参ります」
そこで踵を返して言った。
「その時こそ私は貴女に全てを預けましょう」
そう言うとその場を立ち去った。
「私に全てを・・・・・・」
トゥーランドットはそれを聞き一人呟いた。
「それが愛・・・・・・」
彼女の心は今大きく揺らいでいた。そしてそれは散り散りに乱れていった。
その心は散り散りになったまま夜を迎えた。皇帝は再びあの玉座

に着き民衆は階段の下に集まっていた。
「果たして姫様は謎をお知りになられたのだろうか」
「おい、朝になっただろうが」
皆口々に囁いている。
宦官達の顔は暗い。彼等は自分達の浅ましい欲望の為にリューを死なせてしまったと後悔しているのだ。
「わし等に愛など見る資格もない・・・・・・」
彼等は皇帝の側でうなだれていた。
カラフは階段のすぐ下にいた。その側にはティムールがいる。
「リューがこの場所におれば」
ティムールは悲嘆にくれた顔でそう呟いた。
「・・・・・・・・」
カラフは一言も発しない。ただ階段の上を見上げている。
彼とてリューのことを気にかけていないわけではない。否、他の誰よりもその死を悲しんでいた。
(私は愚かだった)
彼は心の中で自分を責めた。
(そなたの気持ちに気付いていれば・・・・・・)
彼女を受け入れられただろうに。だがもう彼女はいない。そして彼はただ一つの冷たい氷の花を見ていた。
(その花がまもなくここに現われる)
カラフは階段の上から目を離さない。まるで雲をつくように高く思われた。
やがて音楽が鳴った。トゥーランドットがそこに姿を現わしたのである。そして皇帝の側にやって来た。
「お父様」
彼女は父である皇帝に対して言葉をかけた。その表情はいつもとは少し異なって見える。
「あの若者の名がわかりました」
それを聞いたティムールと民衆の顔が蒼ざめる。上にいる大臣や

役人達もだ。
「その名は・・・・・・」
トゥーランドットはゆっくりと話しはじめた。皆次の言葉が発せられるのを絶望した顔で聞いていた。
だがカラフだけは別だった。自信に満ちた顔で姫を見上げていた。
「我が愛！さあ愛よ、我がもとへ！」
彼女は右手をカラフに向けて言った。今までになく力強く明るい声であった。
カラフは階段を駆け登って行った。そしてトゥーランドットを激しく抱き締める。
トゥーランドットも彼を強く抱き締めた。それを見た民衆は叫び声をあげた。
「姫様の心が遂に温もりを覚えられた！」
そして誰かが花を撒いた。
「祝え、祝おう。姫様が愛をお知りになったこの時を！」
彼等もまたトゥーランドットを愛していたのだ。彼等にとって彼女は美しいだけでなく公平で優れた君主であったからだ。
「愛こそこの世を永遠に輝かせる光だ、この世を照らす光を皆で称えるのだ！」
皇帝は玉座から立ち上がり叫んだ。そして役人達がそれに続く。
「皆でこの光を称えよ、愛よ、永遠にこの世に止まるのだ！」
空からリューが降りて来た。彼女は天女の服を着ていた。
「リュー・・・・・・」
カラフは彼女の姿を見て思わず呟いた。
彼女はカラフの前に来ると跪いて微笑んだ。そしてカラフとトゥーランドットの頭上に花びらを撒いた。
それは桃の花であった。天界に永遠に咲くと言われる桃源郷より生まれた桃の花であった。
「祝福してくれるのか、私達を・・・・・・」
彼女は一言も答えない。だが二人の姿を見て微笑むだけであった。

そして天界へ去って行った。後には桃の香りが残っていた。
その香りはその場を包んだ。花が天から舞い降りて来る。それは
まるで二人の幸福を彼女が祝福するようであった。

トゥーランドット　　完

２００４・４・８

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3334f/

トゥーランドット

2011年4月28日00時35分発行